

〈創作〉

## 江戸情七不思議

Seven heartwarming mysteries in Edo

片山 剛<sup>1</sup>

### 要旨

本稿は論文ではなく、歌舞伎竹本三味線奏者の野澤松也（のざわまつや）師からの依頼で創作してきた浄瑠璃のテキストを集めたものである。松也師からは江戸本所（東京都墨田区）に伝わる七不思議についての創作浄瑠璃を依頼され、断続的に書き続けてきた。「本所七不思議」は「七」とは言いながら、それ以上の数の怪異譚が伝わっている。筆者はその中から「灯りなし蕎麦屋」「足洗ひ屋敷」「置いてけ堀」「送り提灯」「送り拍子木」「落葉なき椎」「片葉の葦」を選んで創作した。作曲、演奏は当然ながら野澤松也師、全体のタイトルの「江戸情七不思議（えどなさけななつふしぎ）」も松也師の命名である。

キーワード：浄瑠璃、義太夫節、創作、本所七不思議

Joruri, Gidayu-style music, Creative work, Seven mysteries in Honjo

### はじめに

筆者は本来の研究以外に長年にわたって浄瑠璃の創作をおこなってきた。これまでの主な作品は『斎宮暁白露』<sup>1)</sup>『名月乗桂木』<sup>2)</sup>『ルター』<sup>3)</sup>、能、狂言、文楽、クラシック音楽のコラボレーション演劇（「狂言風オペラ」と称する）の『フィガロの結婚』<sup>4)</sup>などで、そのほかに幼稚園児のための文楽人形劇の執筆もおこなってきた<sup>5)</sup>。

2015年、当時執筆していた著作の編集者S氏にたまたまこれらの話をしたところ、歌舞伎義太夫三味線の野澤松也師<sup>6)</sup>が創作浄瑠璃の活動のための台本を必要とされているからと、その場で松也師に連絡をしてくださった。その後、松也師とのメールによるやりとりを経て、歌舞伎公演の合間にお目にかかり、東京都墨田区に伝わる「本所七不思議」の創作を依頼されたのである。そして、2019年8月現在で松也師によって作曲された5作品<sup>7)</sup>はすでに各地で上演されており、本学でも「日本の文化と歴史」（筆者担当）のゲストとして2曲を語っていただいている。

それを聴いてくださった方から「七不思議が揃ったらテキストとして読んでみたい」という声が挙がり、かといって一冊の本にするほどの分量ではないため、その方法を模索していた。そこで、紀

要に掲載できるか否かを担当部署の図書館（寺口瑞生館長）にお尋ねしたところ、教育研究に関わるものとして掲載可能とご判断いただいたのである。

以下、タイトルの五十音順に作品を並べ、簡単な説明とその全文を掲載する。難字の読み方は現代仮名遣いで（ ）の中に記しておいた。タイトルは浄瑠璃の慣例によって五文字または七文字に統一している。なお、「置いてけ堀」と「片葉の葦」についてはすでに作品があった<sup>8)</sup>ため、「異聞」としておいた。

### 1 灯りなし蕎麦屋（あかりなしそばや）

江戸本所の南割下水（みなみわりげすい）のあたりには屋台の蕎麦屋が出たが、そのなかのひとつの屋台は行燈の灯が消えたまま、店の主人もいない。おせっかいをして灯をつけると不幸に見舞われる、という。

この、無人の蕎麦屋が出現する怪異を人と狸の心のふれあいのもたらすものとして創作した。人間に追いつめられる狸の生きにくさは現代の問題でもある。

それ狐狸（こり）は神妙（しんびょう）にして人

1 Takeshi KATAYAMA 千里金蘭大学 教養教育センター

受理日：2019年9月6日

を欺けど、その故を尋ねれば、必定（ひっじょう）、人に過怠（くわたい）あらん。

夜風しきりの神無月。空十五夜の冴え冴えと本所南の割下水。花も紅葉もなければ千歳（ちとせ）、松花（まつはな）、葉沢（はざわ）橋。青芽（あおめ）、若葉（わかば）は弥生（いやおひ）の今日九重に匂ふらむ。

所の大工、清五郎。鼻歌交じりの独り者。二八蕎麦屋を目に留めて

「おう、親仁。一杯つけてくんねえ。凍える身にはあつたけえ（温かい）のが何よりのご馳走だ」

「あいよ。兄さん、今夜はご機嫌だね」

「わかるかい。土岐様のお屋敷の中間部屋で丁半のご開帳。懐はちよいとあつたまつた。あとはそれ、腹ばつかりが冷えていけねえ」

「博打もいいが、てえげえにしねえと今度は身ぐるみはがれちまいますぜ」

「親仁の説教、大きな世話だ。ハハハ。時に、長岡町の角（かど）で丸に源の字の蕎麦屋があつたが、様子を見ても誰もいねえし、第一、看板提灯が消えたままだつた。ありや、おめえの知り合いかい」

「丸に源。さいですか。今夜は長岡町に出ましたか」

「へつ、出ましたか、つて、幽霊ぢやあるめえし」

「いや、お若えの、その幽霊でござんすよ」

「そりやまたどういふこつたい」

「いえね、この界限で屋台を引いた源吉つてえ父（とっ）つあんが、患ひとつなかつたのに、この月初めにぼつくりいつちまつた。もうあの屋台を見ることもねえな、と思つてあたら、次の夜には青芽橋のあたり、その次には今井様の堀の前、またその次は千歳橋、と毎晩あの屋台が出ましてね。で、いつのまにか姿が失せる。必ず提灯は消えていて、誰言ふとなく、灯り無し蕎麦屋、と気味悪がられてまさあ。あるとき蕎麦屋仲間が提灯に灯を入れてやろうとお節介。するてえと、そいつの長屋からぼやが出た。またほかの仲間が同じやうにすると、今度はそいつが可愛がつてた犬が死にまつた。それからもう、誰もあの屋台には近づかねえんでさ」

「おいおい、この寒空に幽霊かい。狐か狸の仕業ぢやねえのか」

「さうかもしれないがね。さうさう、それで思い出した。このところ食ひ物がねえのか、このあたりにも狸が出て来ちやあ、何かあさろうとする。この間も親子と見える狸がうろうろ、蕎麦にたぬきはつきものだが、あんまり厄介なんで・・・。へい、

お待ち遠」

と、話、きりきり切り上げて。手馴れし技の蕎麦切りを渡せば受け取る折からに、ひたひたひたと足音は二十五六の女房風情。様子うかがひ、立ち止まり、

「お寒うござんす。私にも一杯願ひいたします」

「へい」

「こりや、ご新造さん、まあ、こつちへ寄んねえ。人が寄りやあ、それだけでも暖（あつた）けえ。で、親仁。その狸があんまり厄介だから・・・何だつて」

「ああ、いえね、面倒なんで、これこれ、この杓で親狸の眉間をこつんとお仕置き」

「そりや狸もしやくに障る、つてな。へへへ。聞こえた、その源吉つてえ父つあんも、狸をお仕置き。それで狸公（たぬこう）が屋台に化けて出てくるんぢやねえのか」

「そりや、凶星かも」

と語らへば、かたへの新造、声を掛け、

「いいえ、源吉様はそんなお方ぢやござんせん」

「おめえさん、知ってんのんかい、その父つあん」

「はい。源吉様は大の恩人。と申しますにはわけがある。ことの様子はかういふこと。お聞きなされてくださりませ」

と語り出させば月影は雲に隠るる暗まぎれ。

「本所と言へばもとは辺鄙な片田舎。が、次々にお大名の下屋敷が建ち、上屋敷までお移りになる。けものどもは追ひやられ、食べものとてもままならず。あるとき狸の親子連れ、ふらふらとこの界限に迷ひ込み、あの源吉様のお店の前。ものほしげな子狸をご覧になつて、いささかも哀れにおぼしめされたか、人に見つかりや難儀もあると、灯りを消してやさしげに『狸汁などといつて、わしら人間はおめえたちの仲間を食つてしまうこともある。かわいそうだが、人もまた食はずに生きてはいけぬもの。おめえたちとて子ネズミ捕らへて食らふこともあらうがな。が、今宵ばかりはその供養。生き物同士相身互ひ。遠慮はいらぬ』とにつこりと握り飯をふたつに分け、お恵みなされてくださりました。狸の親子は喜んで、肩を揉むやらさするやら。それですつかりうちとけて、次の日もまた源吉様は蕎麦の残りをお恵みなさる、狸は山から枯れ木を運ぶ。それが二十日も続きましたか。源吉様のご最期を聞いた狸の目に涙。『あの蕎麦屋様がまた見たい』と子狸がねだります。お前様方お察しの通り、あの灯り無し蕎麦屋は源吉様を偲ぶため、狸の仕業でござります。灯りを消

したは源吉様とのお約束  
と語る言葉のひとつづつ真に迫りしありさまに、  
清五郎はいぶかしく、  
「はて面妖な、ご新造さん。おめえ、やけに詳しい  
ねえ」  
と、じつと見やれば八の字眼（まなこ）、鼻まろや  
かな狸顔。薄気味悪く清五郎、背筋も凍る折こそ  
あれ、雲間を出でて望月の光さやかに女の顔、照  
らすを覗いて清五郎びつくり。  
「ご新造さん、おめえ、眉間に傷があるね…」

## 2 足洗ひ屋敷（あしあらいやしき）

本所三笠町の味野家では夜になると天井から大  
きな音がして「足洗え」という声とともに巨大な  
足が降りてくる。洗ってやると天井裏に消え去る  
が、洗わないと家中の天井を踏み抜くという怪奇譚。  
足が天井から抜け出るといふ荒唐無稽な内容を、  
生きる自信を失った若者への亡き父の戒めとして  
表現した。

吹くからに秋の草木のしをるるは、人の心の曠野  
（あらの）まで、分け入る風のすさまじき。むべ野  
分とはいふぞかし。  
秋も半ばの十六夜（いざよい）の月は流るる雲の蔭。  
やうやう募る雨風に、雁の列ね（つらね）も虫の  
音（ね）もふつつり絶ゆる宵の口。道行く人は簑  
笠に身を包みたる三笠町（みかさちょう）。町家（ま  
ちや）も近き古屋敷（ふるやしき）。主（あるじ）  
の味野晴賢（あじの はるかた）は、俄かの病に  
雲隠れ。家督は嫡男笈之助（きゅうのすけ）、次男  
は変はらぬ部屋住みを嘆き憂（うれ）ふる庄之助。  
夕餉（ゆうげ）の膳もそこそこに浮世草紙の下（く  
だ）りもの、手持ち無沙汰に眺めゐる。  
納戸（なんど）の外より  
「入りますぞ」  
と母の声。開く障子に居住まひを半ば正して庄之助。  
「これは、母上。お珍しい。兄上が夜詰（よづめ）  
でお留守でも、野分ごときに怯えて私（わたくし）  
を頼らるる母上でもござりますまいに。ハハハ…」  
「アアコレ、夜更けてさやうに声立て笑ふは不調法。  
喜蔵（きぞう）やおよしに聞こえまする」  
「いかさま。下男どもが驚いて『すは、次男坊は血  
迷うたか』と駆けつけ来たらば大きな恥。時に母上、  
私はさきほど焼香を済ませましたが、もう仏前の  
灯は落とされましたかな」

と逸（そ）らす話も母は受け止め、  
「ただいま母が問ふことにそなたが何とお答へか、  
仏様にお伝へするまで、めつたに灯明（とうみょう）  
消せませぬ。膝を正してお聞きなされ」  
と、声こそ低けれ、ただならぬ剣幕見せられ、庄  
之助、聞こえぬやうに舌打ちも、母はかまはず声  
改め、  
「背丈の伸びた若い男子（なんし）といふものは母  
親の愚痴な説教、聴かぬもの。ましてそなたは父  
上の秘蔵子（ひぞっこ）。が、それを承知で言はね  
ばならぬ。蝶よ花よ、末つ子よと、可愛がられし  
奔走子（ほんそご）が、まさかと思へど、近ごろは、  
丁よ半よと賭け事の悪い仲間に入りますると聞き  
ましたが、それはまことでござるかな。さあ、さ  
うして素知らぬ顔をして、それ、目が泳いでご  
ざるは。味野の家は直参旗本。そのやうなすさん  
だ暮らしをしては、お上（かみ）に不忠。亡  
き父上もお喜びにはなりますまい」  
「いやもう、今宵は空の模様がよからねば早う戻り  
ましたに、母上のご機嫌の雲行きまでがあやしう  
ござる。が、お言葉返すやうなれど、直参と見得  
を張つても馬上（ばじょう）も許されぬ小旗本（こ  
はたもと）。その次男などに明日といふ日はござり  
ませぬ。父親もなき身となつて、婿の取り手も淡  
い望み。一夜々々（ひとよひとよ）の愉しみがせ  
めてはかなき身の置き場。この小納戸（こなんど）  
に息ひそめ、長生きしても兄上の厄介者。いつそ  
戦（いくさ）でもあるならば、命の棄てがひ、ご  
ざりませうに」  
と、糸より細き優しさを隠す言葉の棘（とげ）や針。  
さすがの母も気の毒と継げぬ二の句のしじまより、  
ポツリとしたたるひとしづく。庄之助、天井を仰  
ぎ見て  
「や、雨漏りか」  
とありあふ盥（たらい）据ゑ置けば、母は、はた  
と思ひつき、  
「そなた、芭蕉といふ人をご存じか」  
「芭蕉、といふと、あの六間堀の、頬のこけた俳諧  
師でござりますかな」  
「いかにも。あの御仁（ごじん）はな、草の庵に住  
まひして、それを悲しむまでもなく、千里の彼方、  
唐土（もろこし）の杜甫（とほ）や蘇軾（そしよ  
く）に思ひを馳せ、野分に揺るる芭蕉葉（ばしよ  
うば）と盥に落つる雨漏りの音に我が身を委ねつ  
つ、『芭蕉野分（ばしょう のわき）して盥（たらい）  
に雨を聴く夜（よ）かな』と、発句（ほっく）

はすなはち『わび』の心。その落ち着きを学び取り、夢と望みを持たばこそ若き武士（もののふ）、勇者の魂。そなたには六尺の身体と兄にも劣らぬ剣術の腕がある。今は不遇をかこつとも、いつ何時の塞翁が馬。雨だれたまつたその盥で足を洗つて…」  
「ああ、いやもう、さやうな気休め、おやめなされませ。冷や飯食らひの身なれども、芭蕉先達（ばしょうせんだつ）にあやかつて、奈良茶飯（ならちゃめし）にわさびを添へて、『わび』とやら『さび』とやらのつましさを、せめて味はふ次男の掟（おきて）。味野の家がお大事なら、私（わたし）がことより兄上に早うお美しい嫁御寮、お探しなざるが第一」

と、痛いところをつかれ果て、母はため息、首を振り、「長い話は無用のこと。私はもう休みます。そなたもゆるりとおやすみ」

と、納戸の障子しめやかに閉ざす心を量りかね、うち沈みてぞ立ち出づる。

あと見送つて、庄之助。ごろりとふて寝の肘枕（ひじまくら）。盥に伝ふ雨だれの、誰も悪気はないものを、心の隙間、交喙（いすか）の嘴（はし）。二十二年の歳月を頼みきたりし父親を慕ふ心は一筋に落つる涙の溢（あふ）るとも受くる盥はあらざりし。

更（こう）闌（た）けて、雨は篠突き屋根を打ち、下葉うつろひゆく萩の枝をたわめて吹く風は轟々（ごうごう）として鳴り止まず。物のみ思ふ庄之助、心の澱（よど）み掬（すく）ひ上げ、じつと眉間に集むれば、野分のいとど激しさを増せど、不思議や、その耳に雨風の音遠ざかり、聞こゆるものは雨漏りの盥に跳（は）ぬる音ばかり。

ポツ、ポツ。

ふと思ひ出す秋の日は、それよ、五つか六つのころ、屋敷の戌亥（いぬい）、井戸端にとんぼ追ひつつ走るうち、つまづき転（まる）び、膝擦りむき、泣いてその場に立ち尽くせば、

ポツ、ポツ。

畑仕事の父親が駆け寄り井戸の水汲み上げ、移す盥を足もとに奥底もなき御（おん）いたはり。しやくりあげたる涙を拭ひ、同じ高さの目を見ても、ものも言はずに洗うてくれた、その透き通る水の音。ポツ、ポツ。

思へば、思へば、いつの間に、悔（くや）しや我はこのやうなひねくれ者となりしかと、情け涙にくれるたる。

ポツ、ポツ。

ややあつて、とろとろとろとまどろめば、夢とうつつの狭間（はざま）にて胸騒ぎする折しもある、ぐらぐらぐらと揺る天井突き破り、降（お）りくるものの気配して、胸にずつしり鉄鉛（てつなまり）。そは物の怪か魔物かと思へど開かぬ口、眼（まなこ）。息は早駆け、汗したたり、気は遠ざかる心根に響（とよ）みわたれるその声はまぎれもあらぬ父の慈悲。

「ヤレ庄之助。足洗へ。足、洗へ…」

### 3 送りちやうちん（おくりちょうちん）

提灯を持たずに歩いている人の前に灯りが見え、これはありがたいと思って近づくとその灯りが消え、また灯りが見えるので近づくと消える、という怪異。

土地のならず者に殺された娘がその下手人を伝えるために送り提灯によって道案内をする。虐げられた者の怨念は深く、強い。

枝よりもあだに散りにし桜花。惜しむ心は押上（おしあげ）の月もいざよふ黄昏の道は子ゆえの闇路かや。

前田右京の馳走に預かり、酔（えい）の足取り三枝金吾。中間（ちゅうげん）友平先に立ち、「旦那様、今宵は思ひもかけず遅うなりました。差し出がましいことながら、このところの前田様、御酒をお過ごしではござりませぬか」

「いかさま。がしかし、右京殿のお心もわからぬではない」

「ではやはり、あの、ご息女様の」

「さうさ。奔走子とも掌中の珠ともいとしがられたお絹殿をあのやうな目に遭はされては、右京殿とお心は惑ふといふもの」

「その奔走子様がどうしてまたそのやうに」

「さればよ、睦月晦日のたそかれに、箏曲のお師匠殿よりお呼びがあり、供も連れずにふいとお出かけ。そのままとお帰りなく、一家総出でお探しすれば、田中稲荷の境内に、かはいや、なぶり殺しにされてござつた。お師匠殿の呼び出しといふも偽り。あの美しい娘御に目のくらんだ不届き者の仕業であらう」

「せめて下手人なりともわかりますれば」

「む、それよ。いぶかしきはこの土地のならず者、権六、竹蔵、八兵衛といふ者ども。されどたしかな証拠もなく、問ひ質せども知らぬ存ぜぬ。聞か

ら闇の迷ひ道に入つた。ああ、とつぷりと日も暮れた。友平、そなた提灯は持たぬのか」

「あ、いや、申し訳もござりませぬ。よもやこれほど遅なはるとは。前田様に戻つてお借りして参りませう」

「いや、それには及ばぬ。弥生望月この影をしるべにすれば南無妙法蓮華の法（のり）の恩を受く」とひたひた歩む法恩寺。その南門にさしかかる。花に清香（せいこう）、月に陰。深まる闇に足元のおぼつかなさにうち悩む。先にほんやり薄灯り。友平嬉しく、

「旦那様。あれご覧ませ。誰やら先に行く者が提灯かざしてござりまする」

「さらば追ひつき同道せん」

と、すたすたすた。足を速めて友平が親しき声をそつと掛け、

「もし。あ、これは若いお女中。この暗がりをお一人でお帰りをなさるか。ああ、いや、われら怪しい者ではござりませぬ。こちらは徒組頭（かちぐみがしら）の三枝様。灯りを持たず、難渋してをりまする。両国橋から柳橋越え。お前様も若い身空で無用心な夜歩き。中途まででも連れにならば、定めて相身互ひ」

と問へども何のいらへなく、真白きうなじほの見えて、足音もなく歩みゆく。

「これ、お女中。気に入らぬかは知らねども、返答ひとつできませぬか」

「いや待て、友平。いたはしや、この娘御は、ものが言へぬのであらう。何、恐れて逃げる様子もなし。ついて行かう」

と二歩三歩。四方の木々にそよぐ風。しばし歩めば、提灯の灯りもろとも娘の姿、ふつと消えぬ怪しさに、

「旦那様。こりや、むじなか野干のしわざでは」

「むう、いかにも不審。やあ、友平、あれを見よ。半町先にあの灯り。追うてみやう」

と駆け寄れば、やつぱりさつきの提灯、娘。金吾、友平、息を詰め、跡を慕へば、また消ゆる。消えては離れ、離れては灯る提灯追ふうちに、たどりついたは大川の流れも近き御竹蔵（おたけぐら）。息せき来たる三枝金吾。やをら娘は振り返り、につと笑うて一礼し、泡の消えたるごとくにて、提灯ひとつ置き去りに、二度と姿は見せざりき。

金吾、小首を傾けて、

「今の笑顔の芳（かぐは）しさ。どうやらどこかで見たやうな。おお、それよ、この提灯に明らか

な花橋の紋と言ひ、あれこそ前田右京殿のご息女、お絹殿」

「すりや、この世に恨みを晴らすため」

「いやいや、それなら下手人なにかしの前に姿を現さん。何か告げたきことあつて、我らをここまで導きし。むむ、友平、ここは一体、どこぢやな」

「御竹蔵にござりまする」

「御竹蔵。御竹蔵、お、竹、蔵。それ見よ、竹蔵（たけぞう）と読めるぢやないか」

「それではお絹様をあやめしは」

「ならず者の竹蔵に極まつた。友平、ご苦労ながら今すぐに前田様まで駆け戻り、事の子細をお知らせし、かの竹蔵をひつ捕らへん。我もおつけ参るべし」

「しからばお先に、ひと走り」

と、駆け行く友平見送りて、送り提灯、形見の灯り。妙法蓮華の法恩を受けてはるかに照らす道。飛ぶがごとくに。

#### 4 送り拍子木（おくりひょうしぎ）

本所の割下水のあたりで夜回りをしていると、後ろから自分が打った拍子木の音とよく似た拍子木が聞こえてくる。しかし後ろには誰もいない、という奇譚。

妖しい拍子木の音を、幼い子を守る父の情愛として再現してみた。暴力——それは権力の意味でもある——の横暴や理不尽さへの弱者の精一杯の抵抗でもある。

ちはやぶる神無月、早（はや）うち過ぎて、霜降る月となる音は、本所入江の時の鐘。刻む五つは宵の闇。昼職人辰兵衛が急ぐ家路の向かふより腰の提灯ゆらゆらと

「火の用心」

チョン、チョン

「火の用心、いいかね」

チョン、チョン

と夜回りの声、拍子木に、辰兵衛どうやらいぶかしく

「声は幼し、柀（き）もぎこちねえ。この町の番太郎、弥五郎の父つあんが亡くなって、このところ夜回りする者はなかつたはず。狐、狸の仕業か」

と、恐る恐るも人影をじっと見据えて

「もし、夜回りの。おめえさん、どなたですかい」

と問へば、夜回り、声落とし、

「辰兵衛のをぢさんか」

「やあ、三吉ぢやねえか。さうか、お父つあんの代はりにさうやつて形見の拍子木持つて『火の用心』か。弥五郎の父つあんとは少し音色が違ふが、いや、なかなか胴に入つたもんだ。おつと、あとさきになつたが、悔やみを言はう。お父つあんは気の毒なことをした。それにしても何の罪もねえ者を無残なまでに殴り殺すたあ、許せねえや。どうせ酔つ払えの浅黄裏（あさぎうら）か、たちの悪いならず者のしわざだらうよ。その供養のためと思ふ心はおめえも江戸つ子。だが、まだ小せえんだから早く帰つて休んだほうがいいんぢやねえか」

「いや、をぢさん。おいらももう十二になつた。十二といへばもう大人。煙草も吸ふし、酒も・・舐めたことはある。お父つあんがあんな目に遭つたからには、これからはおいらが番太。夜回りをして、鼻紙や八里半まで商つて、お母さんを助けてやる」

「なんと、けなげなことを言ふぢやねえか」

「時にをぢさん、さつき、おいらの拍子木はお父つあんと音色が違ふと言つたが、どこがどう違ふんです」

「ああ、弥五郎の父つあんはな、チョン、チョン、ぢやなくてな、カ、チョン、チョン、と、最初に小さな音が入る癖があつたんだ。だからあれを聴くと、ああ父つあんの音だ、とすぐにわかつたものさ。おつと、いつまでも立ち話してちやいけねえな。おめえもとにかく気をつけて、早仕舞ひして帰（けえ）んなよ」

「おう、気をつけて回ります」

と、別れの際ににつこりと崩す相好あどけなく、鼻のほくろは父親のこれも形見といぢらしし。仲冬（ちゅうとう）の空冴え冴えと、鼓（つづみ）の星を追いかくる青白星（あおじろほし）のきらめきは親を慕へる子の涙。やすかたと鳴くばかりなり。

「火の用心、いいかねえ」

チョン、チョン。

「火の用心。火の用心。ああ、拍子木持つ手も冷えてきた。心細いし、小腹もすいた、あつたけえ焼き芋が食ひてえな。お父つあんは毎晩こんな思ひをしてお母さんやおいらのために。そんな、そんな大事なお父つあんをどこのどいつがあんな目に。もしまたそいつが出てきたら、この三吉が許さねえ。きつと仇をとつてやる」

と、寒さ紛らす強がりの言葉の角（かど）の横道

よりぬつと出でたる大男。三吉の襟首むんずと掴み、「やい小僧、てめえ何と言ひやがつた。もしまたそいつが出てきたら、さ、そのあとなんとぬかした」

と、土を揺るがす乙声に怖ぢぬ三吉、腹を据ゑ、

「だ、誰だ、おめえは、離しやがれ」

「けつ、生意気な小僧だ。ちよいと物陰で聞いてみたら、どうやらこのあいだの番太郎のせがれらしいな」

「それぢやあ、おめえは」

「さうよ、てめえの親父に引導渡した仙助上人様だ」

「お父つあんに恨みでもあつたのか」

「いや、何の恨みもありやしねえ。あの日は博打の目が出ずに、むしやくしや抱へて帰り道。犬でもゐたらぶちのめさうと思ふところにてめえの親父。こりやいいカモだと後ろから力一杯殴つたらよろけて地面に突つ伏した。あとは頭を踏みつけ、踏みつけ、三度か五度か、いやほんの十度ばかり。ハハハ。それでどうやらお陀仏」

と、人にもあらぬ悪態に、三吉怒りの眼（まなこ）を広げ、

「やい、仙助野郎。おめえそれでも人の子か。お父つあんは犬ぢやない。お父つあんは犬ぢやない。犬ぢやない、犬ぢやない。お父つあんは、お父つあんは、お父つあんだい」

と、あふるる涙、もがく身は子の真実と見えにけり。

「へへへ。さうか、それほど親父が恋しいか。いいとも、それぢや、てめえもこの横川を三途の川としやれこんで、あとは閻魔に掛け合つて、親父に会はせてもらふがいい。三日続いた大雨で川水増したが大きな幸ひ。覚悟しやがれ」

と、三吉の首ぎりぎり締め付くる。

もがく三吉、相手は大物。力及ばず朦朧と気は遠ざかるかなたより、

カ、チョン、チョン

カ、チョン、チョン

と、しじまに響（とよ）むその声は平沙（へいさ）の善知鳥（うとう）、三吉に命を送る送り拍子木。

聴いて仙助、手を離し、

「ありや何だ。この界限に夜回りはほかに一人もあるはずが」

カ、チョン、チョン

カ、チョン、チョン

近づく音に三吉は息吹き返し、

「あの音は、あの音色は、お父つあんだ」

「何。すりやあの親仁めの魂が宇宙に迷つて今ここに拍子木持つて現れたか。おのれ化け物、消え失

(う) せう」

と、思慮分別もあらばこそ、あたりかまはず石礫、  
投げて投げて止まぬ音。

カ、チョン、チョン

髪振り乱して仙助は、

カ、チョン、チョン

よろほひ、よろほひ、駆けめぐり、

カ、チョン、チョン

足滑らせて横川の土手を転げて真つ逆様、濁る川  
水、濁る世の報いこそは見えにけれ。

あとに三吉、涙をぬぐひ、

「お父つあんよお、お父つあんよお」

と慕ふ心に、拍子木は音色やさしく、

カ、チョン、チョン

カ、チョン、チョン

と遠ざかり、夜の帳は下りにけり。

## 5 落葉なき椎 (おちばなきしい)

隅田川沿いにあった肥前松浦家の屋敷には大きな椎の木があり、その木からは葉が落ちることはないという、言い伝え。

取り立てて怪奇というわけではないささいなこと(椎の木は常緑樹)に、若い耳の不自由な三味線弾きの女性の愛の純粹さとその結末をからませてみた。

(どこからともなく聞こえてくる唄)

春は亀戸梅屋敷手に土器の飛鳥山

夏三囲に杜若虫も恋に胸焦がす

秋の萩なら龍眼寺二十六夜の月待ちて

冬しつぽりと浄光寺雪見がてらに酒(ささ)

ひとつ

今宵の客は大尽と名に負ふ和泉屋清右衛門。風流韻事(ふりゅういんじ)を極めたる粋も自慢の大旦那。心をつけて芸者衆。とんとんとと歩み板。三味の糸ほど踏み鳴らし乗り込む舟ぞ雅(みやび)なる。

中に年増の米吉が愛想こぼして進み出で、

「旦那様。いつもありがたう存じます。大川の舟遊びはあたしたちも楽しみで、わけても和泉屋様のお舟とあれば、芸者仲間で評判の随一でございます」

「ははは、米吉得意のお追従。が、『随一』にしては蕙奴の姿が見えぬぢやないか」

「申し訳ございません。実は蕙さん、今朝方の地

震で指を突いちやいましてね。和泉屋様のお舟をしくじるわけには、って、泣きべそかいてたんですけど、指は三味線弾きの命でございますからね。それで、今日はこの夕顔さんが名代(みょうだい)つてことでご勘弁願ひます」

「それは災難だつたな。大事にするやう、伝えておくれ。時におまへさん、夕顔とはまた、辰巳芸者とも思へぬ名だね」

「あ、旦那様。ちよいとお待ちを。(夕顔は聾者なので、一語ずつゆっくりと)夕顔さん。あたしからお話しするよ。(和泉屋に向かつて、普通の早さで)実は、この人、ゆつくり口を動かすとわかってくれるんですけど、ちよいとわけがございまして、耳が不自由なんです。そのわけと申しますのは、あ、よござんすか、お話しして。実はこの人にはいい人がゐましてね。三味線の稽古場で知り合つた茂吉さんといふ人なんです。二人とも筋が良くて、色恋に溺れず、芸も競ふやうに、切磋、なんでしたつけ、そうそう、切磋琢磨。ところがある日茂吉さんが『三年を限りに上方で修業してくる』つて言ひ出したんでございますよ。この人、なんだか、草ばつかり食べてんぢやないかつていふ、ひよろつとした優男で、その上に痰の持病もあるんだそうで、長旅は無理だつて、夕顔さんはとめたんです。すると、ほら、あそこに見える松浦様のお屋敷に、金輪際葉が落ちないつていふ椎の木がございませう。旅立ちの日に夕顔さんをそこに連れてつて『あの葉が落ちねえかぎり、おいらは無事だと思つてくん』とか何とか。まつたくもう、男は勝手なことばつかり言ふんだから。待つ身にもなつてみろつてんだい。あ、それで、『都に着いた』つて文はよこしたさうなんです。それが、それきりふつつり、なしのつぶて。病は出ぬか、いい人ができまいものか、と思ふうち、憂ひは積もり、食細り、身も弱りゆく折からに、去年の冬のはやり病。一夜の熱で、かはいや、大事の耳を患うて、それでふつつり音無しの身となり果つる、いとしばさ」

と、あはれを誘ふ物語り。和泉屋、そつとうちうなづき、

「そんなことがあつたのか。笑止千万、気の毒な。まるで『朝顔話』の深雪のやうな…。さうか、それで『夕顔』か」

「さうなんでございますよ。それで、今日がちやうど約束の三年目の日なんださうで。あら、何だかしめつぽくなつちまいましたね。でも、旦那様。

この人の三味線と歌は聴きものでございますよ。糸の調子も自分で合はせ、寸の狂ひもございません。(夕顔に、一語ずつゆっくりと)夕顔さん、お願ひしますよ」

「船頭さん、手数をかけてすまないが、松浦様の椎の木の間までやつてくれないか。ああこれ、くれぐれも揺らさぬやうに頼みます」

と、汲めど尽させぬ和泉屋の心は深き大川の水にさす櫓のどぶんちやう、蝶の戯る花よりも甘き音色の糸に乗る迦陵(かりょう)の声ぞうるはしや。(唄)

あらたまの年の三年を待ちかねて  
大川端の都鳥いざ言問はむ  
白雲の遠(おち)なる人のありやなき  
三筋の糸のいとしくも  
ちりちりとんと会ふことの  
叶はぬ身とは成り果つる  
頼みに思ふ松浦様  
その椎の木の常青葉  
な散りそ散りその願ひなり

「これは見事。いやはや驚いた。その包み込むやうな甘い音は野澤の家での修業かな」

「さすがは和泉屋の旦那様。凶星でございますよ」

「ひとつ尋ねやう。(夕顔に、一語ずつゆっくりと)音を失うて、何を当て処(ど)に弾いてゐる」

「心の耳でございます」

「心耳心眼、耳目に勝る、か。(夕顔に、一語ずつゆっくりと)学んだぞ、夕顔」

「旦那様、松浦様でござえやす」

「ご苦労でした。(夕顔に、一語ずつゆっくりと)夕顔、簾をあげてごらん。それ、今日も椎の木が葉を落とした様子はない。茂吉さんとやらは、上方の技を身につけて、きつと今夜中には帰つて来やう」

「おつしやる通りでございます。(夕顔に、一語ずつゆっくりと)よかつたね、夕顔さん」

と交はず言葉の口元を読み取り、悟り、都鳥。笑みもほころぶ夕顔の花のかんばせ晴れ晴れと北は筑波か西は富士。皆々心和みけり。簾下ろさせ、和泉屋は、盃「くい」と飲み干して、

「船頭さん、ゆつくりと出しとくれ。さて、今度はなにを聴かせてくれるかな」

と言へば夕顔かしこまり、調子合はする、その折りしも、何知らするや一陣の西風さつと吹き抜くる。波にゆらりと舟傾き、ぷつぷつ切れたる三味線の糸。夕顔はつと面(おもて)を上げ、

「茂吉つあん」

と言ふより早く、簾差し上げ見上ぐれば、ひらりひらひら一枚(ひとひら)の椎の木の葉の舞ひ下りて、波に揺られて漂へり。

## 6 異聞置いてけ堀(よそにきくおいてけぼり)

本所の堀で釣りをしていた者が帰ろうとすると堀の中から「置いてけ」という声がした(そのあとは「魚籠を置いて逃げ帰った」など多種の言い伝えがある)という伝承。

カッパの娘が人に殺された祖父の仇を討とうとして人間の妻となつてその機会をうかがう。権力のむなしさを風刺した。

河(かわ)たろの恋する宿や夏の月。

横十間(よこじっけん)もほど近き井上筑後の下屋敷。植木の御用仕舞ひにて帰る道筋すたすと、女房お河が手料理とやはき肌へを楽しみに、月の光を背に受けて、黄金(こがね)に揺るる錦糸堀。その黄昏の向かふより

「出た、出た」

と息はづませて駆け来る男。

「もしおめえさん、どうなすつた。なんだ、喜助ぢやねえか」

「与吉か。出たんだよ、『置いてけ』が」

「『置いてけ』つて、あの、近頃評判の」

「おおよ、釣つた魚を置いてけと、水の中から声がする。すは河童かと逃げだして、お天道様が出る頃に戻つてみれば魚籠(びく)だけがぼつんとそれに残つてる、つてえ、あの『置いてけ』だよお。ああ、寒気がする。おめえもとつとと帰るがいい。あばよ、さらば」

と駆け出だす。与吉は元より強胆(ごうたん)者。魔物とあればこの腕でひつ捕らへんと忍び足、ぼんやり見ゆる影ひとつ、

「違ふ、これも違ふ」

といふ声のどうやら女と聞き耳を立つるまもなく

「置いてけ、捕つた、覚悟しろい」

と小がひな振(ね)ぢ上げ、顎先を月にかざせばその顔は、

「やあ、おめえはお河ぢやないか」

「おまえさん」

「てめえよくも河童のまねして魚盗人(さかなぬすつと)はたらきやがつたな。そりや、おいらの稼ぎは少なえが、だからといつてばかにすんねえ。



おりや情けねえ、情けねえやい」  
「いや、おまへさん、さうぢやない」  
「いいわけするねえ。現在この目で見ただけからは、てめえのど性根きつと覚えた。どう掬摸（ずり）、騙りの大盗人め」  
「まあ、ちよつと聞いとくれ。あたしや、河童のまねをしたんぢやない。人間のふりをしてたんだよ」  
「なんだと。そりやどういふこつたい」  
「この上はもう隠し立ては無用の事。その目でしかとご覧なされ。まつこのとおり」  
と懐のシダの葉取り出し、頭（こうべ）に載せ、  
「はっ」  
と掛けたる声もろとも、女房消えてそのあとにすつくと立つたる河童の姿。  
与吉、び、び、び、びつくり仰天、  
「女房の正体見たり河娘（かわむすめ）。さうだつたのか。道理で初めておめえの口を吸つた時、生臭えと思つたんだ。漬物はキユウリ、茶菓子はえびせん、酒はいつだって黄桜だ。さあ、その河童がどうしておいらを騙したのか、できるもんなら言ひ訳してみろい」  
と頭ごなしに喝破（かっぱ）され、  
「クワッ。さらば私の身の上と今に至つたその本末（もとすえ）、クウェッ。物語らん」  
と、両手をつかへ、  
「私の爺様（じさま）は今年八百八十八歳で、近ごろはこの錦糸堀の夕陽を眺めて西方浄土を慕ふ日々。あれは三月うらかな春も名残の十五日。その日はたまたま人通りがなく、爺様はうつかり陸（おか）に上がり、頭の皿の乾くのも忘れてうはの空でいたさうな。夕餉（ゆうげ）の支度ができましたと私が迎へに来た折しも、酒（ささ）機嫌の釣り人が通りかかつて爺様を見つけ『河童ぢやないか』とからまれて、相撲自慢の爺様とて陸に上がれば力なく、わつぱさつぱのその挙句、役人らしきそのさむらひに魚籠のかどにて頭を打たれ、クエッ、大事の皿が木つ端微塵（こっぱみじん）。そのさむらひが去つたあと、私が駆け寄つたその時は息も絶え絶え。『やれ孫娘、ままま、待ちかねたはヤイ』と芝居のやうな断末魔。『孫よ、今のさむらひの魚籠には「入り山形」の紋と「梅」の字が見えた。それを目当てにかたきをとつてくれまいか』と言ひも果てぬに、あへなくも、クワッ、いとしや、はかなくなりたまふ」と、かつぱと臥して泣きあたる。  
「そいつあ笑止千万。『入り山形』といへば林田様

か近藤様か…。で、どうしたい」  
「はい、爺様のかたきをとりたくても、暗がりでおさむらひの顔も覚えぬ魚籠の紋など滅多にみつかるものぢやなし。切羽詰まつてしばらくは阿呆な人間の妻になり、通りすがりのふりをして、釣り人あらば『その魚籠置いてけ』と脅しては、入り山形の紋と梅の文字を目当てに跡を追つて敵討ち、との魂胆。シダの葉つばでさつぱりと頭撫でれば人間に化けることなどへのかつぱ。さも美しい娘御の姿で道行く酔つ払ひ、だましてやると見回せば、通りかかつた与吉さん。クウエエ、お前の姿の美しさにあたしや思はずうつとりと・・・」  
「待ちやがれ、お河。おいら、自慢じゃねえが色男だの二枚目だのとは縁のねえ面相だ。嫌味ばつかり言ふもんぢやねえやい」  
「いえいえ、それは人間の見る目のなさがお気の毒。はれぼつたい垂れた目も、ありやなしやのその鼻も、とがつた口やらあばたまで、絵にあるやうな殿御のおいで。人間様とはつゆ知らず、河童の浅い心から、いとらしい、かわいらしいと思ひそめたが恋の罫。さうしてあとはお前の家に押しかけ女房」。  
「フン、ま、おめえの気持ちもわからないぢやねえが、人間様の世の中で、しかも相手がお役人なら諦めるほかはねえつてもんだ」  
「与吉さん、お前、この世で一番偉いのは誰だと思つてんだい」  
「そりや公方様に決まつたら」  
「なにさ、あんなろくでなし」  
「馬鹿野郎、声が高え」  
「おや、將軍をろくでなしと言つたら国家機密漏洩罪で捕まるつてのかい。人間といふのは不思議なもの。喧嘩に勝つたといふだけで、やれ將軍よ、大名よとまつりあげられ、その子々孫々までもがわが手柄と勘違ひする浅はかさ。ほんとに世の中を、人の心を動かすのは人間ぢやない。人間に化けた河童なんだよ。ま、ま、もちつと聞いとくれ。小名木川のほとりには『古池や河童飛び込む水の音』と詠むところ、ちとはばかつて『かはづ』と言つたあの芭蕉河童。割下水のそばには『北斎漫画』に河童の自画像を描（か）いた北斎河童、やよす河岸（がし）にはやつぱり河童を描いた広重河童がいるぢやないか」  
「なんだと、ありや、みんな河童だつてえのかい」  
「さうともさ。どうせそのうち幕府も將軍もなくなつちまう。でも、俳諧も浮世絵も歌舞伎も浄瑠璃

もなくなりやしないんだよ。国破れても花は咲く。それを教へるために河童が人の姿になつてゐるのに、人間はどうしてそれに気が付かないのさ」  
「ふざけるねえ。おめえの言ふことなんざめちやくちやだ。モウモウ、そんな戯言（たわごと）聞く耳持たず、三行半（みくだりはん）にも及ぶめえ。ここできつぱりおさらばするぜ。大うそつきの化け物め」

と、言葉投げ捨て与吉はふいと我が家をさして帰る道、すれ違うたるさむらひの釣り人らしきその風情、何やら心にひつかかり、柳の蔭に立ち止まる。あとにお河は沖の石の人こそ知らね乾く間も涙に濡れて泣いじやくる。件のさむらひ目ざとく見つけ、「動くな、河童」

といふ声に、我に返つてお河はさつと逃（のが）れど逃れず利き腕取られ、ふと振り返れば釣りざむらひ、持つたる魚籠にはつきりと入り山形に梅の文字。「やあ」と驚くその隙に、腰に用意の縛り縄、手馴れしわざと高手小手、きりきりきりといましむる。

「今日はあいにくのぼうずだつたが、ここで思はぬ大物が釣れた。若い雌（め）がつぱの刺身は珍味と聞く。さあ、歩きをらう」

とお河引つ立て行かんとする。

柳の蔭に与吉はうなづき、

「ありやあ、確か御先手組（おさきてぐみ）の同心近藤梅蔵様。そうかあの御仁がお河の爺様を。いや、ありやお河ぢやねえ。人間様ぢやねえ。鬼畜化け物の仲間ぢやねえか。何が芭蕉河童だ、北斎河童だ。いいかげんなこと言ふんぢやねえやい。花のお江戸は將軍様のお膝元。河童の住むところなんぞ、金輪際ありやしねえ。見せ物にでも売られちめえ、斬り刻まれて食はれちめえ。ありや、お河なんかぢやねえんだ。人間様ぢやねえんだ」と憎めど嫌へど溢れ出る涙に霞む錦糸堀。金糸銀糸のさざ波はゆれてまばゆき風情なり。

与吉、かあつと目を見開き、柳の蔭より乙声に、「お役人様、いやさ近藤梅蔵殿。その河童、置いてけ」。

## 7 異聞片葉葦（よそにきくかたはのあし）

本所駒留橋の葦は片葉で、それはここで留蔵という男にお駒という女性が片腕を切り落とされて殺されて以来の事だという話。

お駒の怨念を幽霊として登場させるのみならず、その妹を救い、将来を案ずる姉の気持ちを表現し

てみた。

夕されば沢の葦の葉おとづれて、大川端の入堀に射す月影は長月の、あとの月見の十三夜。七つの草も人の目もかれて行方も見えばこそ。

娘お里はとほとほと歩み、槻弓（つきゆみ）梓弓。はるかに照らせ暗き道。鐘はいつしか六つ鳴りて八つ九つの手すさびに習ひ覚えし十団子。載せて持つたるさらさらに泣くといふではなけれども、頬を伝はるひとしづく。あたら十九の初秋に露と散りぬる姉お駒。人知れずこそ慕ひきて、手を合はせたる横顔は、目はくりくりと頬高に団子の鼻も乙御前（おとごぜ）とまだおほこなる風情なり。むべこそ逢魔時といふなれば、鬼か邪念の大男。ぬつと立ち出で、

「お里ぢやねえか」

と呼ばれてお里は肝つぶし、おそろおそろ細目をあけ、

「留蔵の兄（あん）ちゃん…脅かさないどくれよ」

「こつちこそ驚いたぜ。黄昏時に若（わけ）え女の一人歩き。物騒だとは思はねえのか」

「余計なお世話だよ。このあたりで一番物騒なあなたに会つたんだから、これ以上危ないことはないのさ」

「チエツ、口の減らねえ小娘だ」

「さういふあんだつて、今ごろ何だい。まさか橋の下で賽子（さいころ）振るつてんぢやないだろ」

「なあに、この川べりはお駒を、いや、お駒が殺された場所ぢやねえか、あれから数へて四十九日、念仏のひとつも唱へてやろうかと…。そうか、それでおめえも供養の餅のかはりに、団子の供へ。日ごろお駒の悪口ばかり言つてたくせに、お優しい妹さんだね」

「そんなんぢやないよ。今夜は十三夜のお月見だからさ。だいたいお姉…、お駒つて奴はあたしにとつちや目の上のこぶ。くたばつちまつてよかつたのさ」

「ほう、ずいぶん威勢がいいな」

「だつてさうだろ。世間の奴らは口を一つにして『お駒は美しい、物言ふ花だ、小野のおこまちだ』つて、へたな洒落まで言つてほめそやすぢやないか。同じ姉妹（あねいもうと）でもかうも違ふのか、つて顔してさ。あたしはいつだつて引き立て役。何さ、美人だの、なんだのつたつて、そんなの面（つら）の皮一枚のことぢやないか」

「こいつあ、えれえ剣幕だ。それでもおめえには優

しい姉貴だつたらうに」

「フン、不器量な妹を憐れんでたんぢやないのかい」  
「さうひがむなつてことよ。おめえだつてお駒の年輩（としばい）になりやあ捨てたもんぢやなからうぜ。ところで、下手人はもうお縄になつたのか」  
「それが、何の証拠も残さず、誰にも見られずに逃げたらしくて、お役人様のおつしやるには、行きずりの金目当ての流しのしわざなら、わからないかもしれないつて…」

「そいつあ、気の毒だ。だが、おめえがさうやつて、そのつまみのかんざし、そりやあ、お駒の形見ぢやねえか、それを大事に着けてるってえのはいい供養になるだらうよ」

と言はずもがなの迂闊なる言葉の端を聞きとがめ、  
「ちよいと待つとくれ。このかんざしは、お駒があの日にはじめて着けたものだよ。この近くに落ちてたのを番屋の旦那があたしに届けてくれたんだ。なんであんたがこれを見てすぐにお駒のものだとわかつたんだい」

「いや…きつと…さうだろう、と」

「うそだ。留蔵の兄ちゃん。ひよつとして、あんたが」  
「フン、余計なこと言つちまつたぜ。さうよ、あの日もちやうどこんな夕暮れで、月は遅出の薄ら闇。近ごろとんと女つ気がなくて、もやもやしている向かふから、そのかんざしも愛らしい、ものにするにやあまたとねえ弁天様のご到来。河原に連れ込み葦の葉敷いて、この世の極楽と胸算用。ところがどつこい、あの細腕で思ひのほかの力技。こ、こ、この首筋の傷跡はお駒の爪。三日もすりやあ治るはずが、妙な痣になりやがった。傷つけられちやあ男の名折れ。七首（あいくち）見せて脅したが、ひるむと見せてあたりかまわず砂礫（すなつぶて）。撒かれたからには、憎さも百倍。力任せにくつとひと突き」

「ひどいことを…。それでもあんた人間かい」

「いいや、人間ぢやねえ。鬼だよ、天魔だよ、ごろつきだよ。だから何でもできるのさ。さあ、これだけ話してやつたんだ。てめえのいとしい姉上様が三途の川の渡し場でひと月半の待ちぼうけ。とつとあとを追ひやがれ」

と、じりじりじりとにじり寄る。丈は六尺、大丈夫。ひるむお里を抱へ込み、節くれだつたる指先が、ぎりりぎりりと喉首に食ひ込み、食ひ入るその折しも。

見るも怪しや不思議やな、川辺に生ふる葦の葉の片葉ばかりが舞ひ上がり、渦巻く中にすっくりと

立つと見ゆるは在りし日のあら美しやお駒の姿。

「お姉ちゃん」

「やあ、お駒め、迷うたな」

「留蔵殿。お前の仕打ちはうらめしけれど、恨みつらみは後世の妨げ。きつぱり忘れて旅立たう、と覚悟定めて四十九日。さりながら、お里にまでも手を出すからは、お前の襟首ひつ捉へ、閻魔の庁へ連れていく」

と、氷の眼に見据ゑられ、さしもの留蔵、すくむ身のわなわなとして金縛り。

「お駒。は、は、早まるな。料簡しろい。勘弁しろつてんだ。わかつた、わかつたよ。おいらが悪かつた。すまねえ。このとほりだ。だ、だから、許してくれ、許してくれ」

と、言葉しどろに膝震はせ、おろおろ、あたふた、うろたへて、闇の底へと落ちて行く。

あとにお里は涙を拭ひ、

「お姉ちゃん、助けてくれたんだね」

「妹の難儀を見過ごす姉はいないんだよ」

「あたいは、あたいは、ばかだから、ほんとは大好きなお姉ちゃんに、いつだつて逆らつてた。そんな、そんな悪い妹を…」

「悪い妹は、お団子を供へちやぐれないよ」

「お姉ちゃん、お姉ちゃん。あたしもそつちへ連れてつとくれ」

「それは叶はぬ。この川岸の葦の葉も、片葉が散れば残る葉は風にも耐へて生きねばならぬ。姉がなければ年老いた親のお世話は誰がする。そなたのこしらへるお月見のいしいし（団子）は味も形も器量よし。そのお団子に葦の葉巻いて『片葉団子』と名を付けて本所の名物にしてござれ。

（唄）

里の芋なら十五夜なれど

妹（いもと）の里は十三夜

白玉か何ぞと人の問ふならば

そのうつくしきてのひらに

情けをつつむ十団子（とおだんご）

露と消え行くこの姉を

恨みそ

恨みそ

恨みやるな

お里かはいや、いとしや妹（いもと）

百代（ももよ）八千代ののちまでも

葦の葉香る十団子

南無阿弥陀仏、後生清浄土（ごしょうしょうじょうど）。これにて成仏叶ひます。お里、おさらば、

達者で」  
と、かそけき声に、お里は駆け寄り、  
「お姉ちゃん、あたいだけの、お姉ちゃん」  
と呼べどはかなき夕闇に雲隠れゆく西の空。  
あはれあまたの葦の葉をあとに残してあへなくも  
夢幻と消えにけり。

注

- 1) 文楽なにお賞受賞作。大津皇子とその姉大伯皇女にまつわる時代物。上演はされていない。1992年作。
- 2) 浄るりシアター戯曲賞受賞作。大阪府能勢町の人形浄瑠璃劇団のための喜劇で、作曲は文楽・三味線の鶴澤清介師。浄るりシアター、森ノ宮ピロティホールなどで繰り返し上演されている。1996年作。
- 3) 文楽・太夫の豊竹呂太夫師の依頼による作品で、大阪府中央区の日本福音ルーテル大阪教会で初演。宗教改革500年を記念して、マルティン・ルターの苦悩を描いた。作曲と演奏は呂太夫師と文楽・三味線の竹澤団吾師。2017年作。
- 4) ボオマルシェ原作、ダ・ポンテ脚色、モーツァルト作曲の同名作品を狂言、能、浄瑠璃のコラボレーション劇として執筆（能楽・笛方の藤田六郎兵衛師加筆）。芸術監督は大槻文蔵師（能楽・シテ方）。作曲は豊竹呂太夫師と鶴澤友之助師（文楽・三味線）。出演は豊竹呂太夫、桐竹勘十郎（文楽・人形遣い）、赤松禎友（能楽・シテ方）、野村又三郎（狂言）、茂山あきら（狂言）、茂山茂（狂言）、山本善之（狂言）ほかの各師とクラングアートアンサンブル（スイスの管楽合奏団）。2017年作。2018年、2019年に全国各地で巡演。2021年再々演予定。
- 5) 『ごんべえさんとやまのかみさま』ほかこれまでに6作品を創作し、2011年から毎年一回上演（継続中）。  
片山剛. 幼稚園における文楽人形劇の試み. 千里金蘭大学紀要 (13) 179頁-191頁 (2016)
- 6) 歌舞伎竹本連中三味線。野澤松之輔師の弟子となり、文楽でデビュー。師の逝去後歌舞伎に移る。作曲に「NINAGAWA 十二夜」など。創作浄瑠璃の会を設立して全国で弾き語りの活動をおこなっている。

- 7) その後、すべての作曲が完成し、2020年には上演される予定である。
- 8) 本所七不思議の創作浄瑠璃には、すでに橘凜保氏による「置いてけ堀」「片葉葦」の二作があり、筆者は残りの五作を書くつもりであった。しかし、松也師から新たに七つすべてを書いてほしいと言われ、橘氏の作との区別のためにタイトルに「異聞」と付けておいた。

※7作品の完成順（年）は以下のとおり。

- ① 送りちやうちん (2015)
- ② 送り拍子木 (2015)
- ③ 灯り無し蕎麦屋 (2015)
- ④ 落葉無き椎 (2016)
- ⑤ 足洗ひ屋敷 (2017)
- ⑥ 異聞片葉葦 (2018)
- ⑦ 異聞置いてけ堀 (2019)